

【あ 行】

安忠の二階堂坊を弟子の忠^{*}乘法印が継承していたことが記されている（金文四二三三）。通称は、大式。

印円 治承四年（一一八〇）—正嘉元年（一二五七）。父

信濃守藤原教房（僧官・明）。天台山門流（阿・門）。

暦仁元年（一二三八）六月二十七日、九条道家が出家

を遂げた時、剃手を勤めた（吾）。寛元三年（一二四

五）六月二十六日、関東五壇法で軍荼利明王壇を勤め

た（阿・門）。この修法のために鎌倉に下向したと推

測される。時に、権僧正。建長二年（一二五〇）七月、

延暦寺楞嚴院檢校に補任（延暦寺文書一一二）。正嘉元年

十一月、入滅、七十八歳（僧官）。通称は、善学院・

定法寺。

印教 承元元年（一二〇七）—？。家族未詳。真言広沢

忍辱山流。宝治元年（一二四七）四月二十七日、定清^{*}

から大門寺で忍辱山流の伝法灌頂を伝授された。時に、

律師（血）。正嘉二年（一二五八）六月四日、勝長寿院

供養曼荼羅供で伴僧を勤めた。時に、権少僧都（吾）。

弘長元年（一二六一）二月二十日、鶴岡大仁王会で安

安潤 生没年・家族未詳。天台山門流（門）。正慶二年

（一二三三）二月九日、聖恵^{*}が北条高時の御願として

高時亭で大阿闍梨を勤めた天下静謐御祈熾盛光法の唱

礼を勤めた（門）。時に、僧都。通称は、伊予。

安忠 生没年・家族未詳。天台山門西山流。澄豪の灌頂

弟子。鎌倉の二階堂に住坊を構えた（金文四二三三）。自

坊が焼失した時、称名寺に聖教を借用したいと申し出

た書状が残る（金文二四四六）。弘安九年（一二八六）

正月十五日、源恵^{*}が導師を勤めた將軍惟康親王の変異

御祈熾盛光法で陀羅尼を勤めた（門）。以後、正安三

年（一二三〇）八月七日、源恵僧正の本坊（日光山犬

懸谷坊）で行われた北条貞時の子菊寿御前御勞御祈冥

道供まで源恵の助修を勤めた（門）。極官は僧正（金

文四二三三）。元徳二年（一二三〇）の金沢貞顕書状に、

祥寺僧正良瑜分として伴僧を勤めた(吾)。

印勝 生没年・家族未詳。真言小野安祥寺流。康元元年(二二五六)十二月、良瑜から大門寺灌頂堂で安祥寺流の伝法灌頂を受けた(血)。

印尊 生没年・家族・法流未詳。元久元年(二二〇四)

二月十三日、右大将家法華堂御仏事の導師を勤めた(吾)。承元二年(二二〇八)十二月十七日、鶴岡神宮

寺薬師如来像開眼供養の開白導師を勤めた(吾・脇)。

同四年十二月十五日、月蝕御祈を勤めた(吾)。通称は、摩尼房阿闍梨。

胤助 建長三年(一二五二)―?。父相馬胤繼(血・西

院)。真言広沢流。伝法灌頂のために、鎌倉に来たと

推測される。文永九年(一二七二)、*元瑜から保寿院流の受明灌頂を受けた(血)。永仁元年(一二九三)十

二月二十一日、元瑜から西院流伝法灌頂を佐々目御影堂で受けた(血・西院)。通称は、介阿闍梨。

胤昭(胤照) 生没年・家族未詳。真言広沢流。*宏教の

弟子(血・伝附)。建長七年(一二五五)四月七日、宏

教が興実・宗真に伝法灌頂を受けた時、職衆を勤めた。

同年四月二十四日、宏教が元瑜に伝法灌頂を受けた時、職衆を勤めた(血・伝附)。通称は、能登阿闍梨。

運雅 建治三年(一二七七)―元応二年(一二三二)。父

六波羅評定衆長井頼重(血・天文本大江系図)。真言小

野流。正応五年(一二九二)八月二十四日、覚雅から若宮八幡宮を譲られた(鎌一七九九)。永仁六年(一

二九八)八月二十日、玄慶から醍醐三宝院流の伝法灌

頂を受けた(伝法血脈)。*憲淳から醍醐報恩院流を学び、頼瑜から重授を受けた(野沢・伝法血脈)。京都で、若

宮八幡宮の別当を勤めた(大覚寺法皇御灌頂職衆交名)。

徳治二年(一三〇七)七月二日、法印に叙す(任)。延

慶元年(一二三〇八)正月二十六日、後宇多院伝法灌頂の職衆を勤めた(大覚寺法皇御灌頂職衆交名)。正和二年(一二三三)、権僧正に補任(任)。同五年三月六日、

公玄に三宝院流の伝法灌頂を受けた(血・伝法血脈)。

元応二年九月二十三日、入滅、四十四歳(常)。通称は、

蓮蔵院僧正。

雲聖 ?—元亨三年(一三三三)。父延暦寺阿闍梨淨覚、

に入集した勅撰歌人。通称は、大納言。

藤原資季の猶子(尊)。天台山門流。源惠の門弟(尊)。

永契(求契) 生没年・家族・法流未詳。建久二年(一

永仁元年(一二九三)二月二十二日、源惠が大阿闍梨

一九二)、鶴岡小別当に補任(諸・脇)。通称は、肥前

となつて伏見天皇御所で勤めた異国降伏祈禱七仏薬師

法橋。(脇)は求契とするが、誤字か。

法の助修を勤めた(門)。同五年三月三日、源惠が大

永守 ?—貞治六年(一三六七)。真言僧。建武三年(一

阿闍梨を勤めた將軍家久明親王天変御祈仏眼法で、伴

三三六)六月、鶴岡密乗坊供僧に補任(諸・供)。貞治

僧を勤めた(門)。時に、法印。正安三年(二三〇一)

六年八月二十七日、入滅(諸・供)。二階堂に住房を

八月七日、源惠が導師を勤めた北条貞時の子菊寿御前

構えた(諸・供)。通称は、大夫。

御旁御祈冥道供で、助修を勤めた(門)。同年十二月

永秀 生没年未詳。父上総公承仁(尊)、関白殿御孫

十一日、源惠が導師となつた関東冥道供の助修を勤め

(諸・供)。天台寺門流(諸・供)。建久七年(一一九

た(門)。同年十二月二十日、源惠が大阿闍梨を勤め

六)三月十八日、梶原景時の推挙により鶴岡文恵坊供

た異国降伏祈禱七仏薬師法の助修を勤めた(門)。嘉

僧に補任(諸・供)。日向薬師堂住僧を兼帯した(諸・

元元年(一三〇三)六月二十七日、將軍久明親王御所

供)。

(赤橋久時宿所)で源惠が導師を勤めた彗星御祈仏眼法

永宣 生没年・家族未詳。天台寺門流(証年)。証菩提

の伴僧を勤めた(門)。正和四年(一三二五)七月、執

寺供僧を勤めた(証年)。通称は、少輔。

権北条熙時所旁御祈冥道供の導師を勤めた。時に、前

永尊(尊齊) 乾元元年(一三〇二)—元徳二年(一三三

権僧正(門)。熙時は七月十八日に卒去(門)。元亨三

〇)。真言僧(諸・供)。正和五年(一三二六)八月、

年六月二十三日、宇都宮で入滅(門)。『玉葉和歌集』

鶴岡密乗坊供僧に補任(諸・供)。同年八月二十五日、

鶴岡御殿司補任を兼任（諸・供）。元亨三年（一一三三）、將軍家護持僧に在任（関東將軍家御祈禱結番廿四人衆案）。元徳二年七月一日、入滅（諸・供）。通称は、播磨。

栄海 弘安元年（一二七八）―？。父は、大舍人藤原業

俊（野沢）と権律師聖誉（尊）の二説がある。真言小

野勸修寺流。聖濟から伝法灌頂を受けた（野沢・諸）。

応長元年（一一三一）四月二十一日、鎌倉の二階堂亀

淵房で聖教を書写、三十四歳（永）。正和五年（一一三二

六）八月、鶴岡座心坊供僧に補任（諸・供）。元応二年

（一一三〇）六月十五日、月蝕御祈辞退の咎により鶴

岡座心坊供僧を解任。同年八月、権僧正に補任（諸・

供）。同年十二月二十六日、鶴岡座心坊供僧に還任

（諸・供）。元徳二年（一一三三）八月二十一日、東寺

長者に補任（東）。日輪寺寺務を勤めた（諸・供）。通

称は、民部卿・慈尊院。

荣西 永治元年（一一四二）―建保三年（一一二五）。備

中国吉備津宮人賀陽氏の出身、母は田（田使）氏（元）。

天台山門流、葉上流の祖。永治元年四月二十日、誕生

（元）。久寿二年（一一五五）、延暦寺で得度受戒（元）。

保元二年（一一五七）に千命から密教を学び、平治元

年（一一五九）には延暦寺東塔の竹林房有弁から天台

教学を学んだ（元）。伯耆国大山で基好から川流を学び、

延暦寺で顕意から穴太流の伝法灌頂を受けた（元）。

仁安三年（一一六八）四月、入宋（元）。文治三年（一

一八七）三月、入宋（興禅護国論）。建久二年（一一九

一）七月、帰国（元）。同五年七月、延暦寺の訴えに

より、達磨宗（臨濟禅）を一宗として建てることを禁

止された（百鍊抄）。正治元年（一一九九）九月二十六

日、鎌倉幕府で新造不動尊の開眼供養の導師を勤めた

（吾）。同二年正月十三日、右大將家法華堂で源頼朝一

周忌供養の導師を勤めた（吾）。同年閏二月十三日、

恩賞として亀谷の土地を寄進されて寿福寺を創建、顕

密禅兼修の道場とした（吾）。同年七月十五日、新造

十六羅漢図像の開眼供養の導師を勤めた（吾）。建仁

二年（一一〇二）三月十四日、北条政子・源頼家結縁

灌頂の導師を勤めた（吾）。同年、源頼家を開基とし

た顕密禅兼修の寺院として建仁寺を創建し、開山上人となつた（帝王編年記）。元久元年（一二〇四）十二月十八日、源実朝結縁灌頂の導師を勤めた（吾）。建永元年（一二〇六）十月十一日、東大寺大勧進職に補任（東大寺大勧進文書集三七）。以後、大勧進として東大寺造営領国周防国を經營した（愚管抄・東大寺大勧進文書集四五・四六・七七・七八）。建暦二年（一二二二）正月十五日、法印に叙す（業資王記）。建保元年五月四日、源実朝の推挙により権僧正に補任（吾）。同二年六月三日、諸国炎旱につき、鎌倉で祈雨祈禱を勤めた（吾）。同年七月二十七日、大慈寺落慶供養の導師を勤めた。死去の時期については、同三年六月五日に寿福寺で亡くなつたとする説（吾）と、同年七月五日に建仁寺で亡くなつたとする説（沙石集・建長寺和漢年代記）がある。通称は、葉上僧正。『続古今和歌集』に入集した勅撰歌人。

荣算 生没年未詳。鎌倉後期の慶算流宿曜師（赤澤論文）。所用で鎌倉に招かれたと推測される。永仁四年（一二

九六）十月二十一日、京都から鎌倉に下向（親）。嘉元元年（一二〇三）四月二十七日、昭訓門院御産御祈七曜供を本坊（京都）で勤めた（門）。延慶三年（一二三〇）十月十九日、花園天皇の大属星供を勤めた（花）。同年十月二十七日、広義門院御着帯御祈三星供を勤めた（公衡公記・門）。

荣紹 生没年未詳。真言僧（諸・供）。元応二年（一二三二）〇三月二十三日、前任者賢基^{*}の所労により、鶴岡実円坊供僧に補任（諸・供）。通称は、大輔。

荣朝 永万元年（一二六五）―宝治元年（一二四七）。天台山門葉上流。^{*}荣西の灌頂弟子。建仁年間（一二〇一―一〇三）、荣西から天台密教葉上流の伝法灌頂を受けた（元）。武蔵国慈光寺に靈鷲院を創建し、院主となつた（靈鷲院寺伝）。承久元年（一二一九）、上野国新田庄世良田に長樂寺を開山した（元）。寛元三年（一二四五）五月十八日付の慈光寺銅鐘銘には「願主権律師法橋上人位」と僧官僧位が記されている。

荣範 生没年・家族・法流未詳。元亨元年（一二三二）、

鶴岡北斗堂供僧に補任（諸・脇）。通称は、伊予律師。

益助法親王 建長七年（一二五五）—嘉元三年（一三〇

五）。真言広沢流。父岩倉宮忠成王、母参議高倉範茂

女（尊・血・紹運録・仁和寺・金文六六九二）。開田准后

法助に入室し、真言広沢西院流を頼助に学び、弘安八

年（一二八五）正月二十七日、頼助から仁和御流の伝

法灌頂を受け、以後尊法を伝授されていた（血・野

沢・野沢大血脈・仁和寺・金文六六九二）。永仁元年（一

二九三）八月一日、性仁法親王から同年三月孔雀経法

行事賞を譲られ、僧正に補任（親）。同六年十月十三日、

佐々目遺身院で長助に伝法灌頂を受けた（血・西院）。

同七年三月二十一日、元瑜から重受を受けた（血・野

沢大血脈・仁和寺）。菩提院流を了遍から受けた（野沢）。

乾元元年（一三〇二）、益助が経助に授けた伝授目録

を作成（金文五八三三）。同年、東寺執事に補任（東）。

嘉元二年四月六日、関東佐々目坊で益性法親王に『諸

尊法目録』を伝授した（金識一三二二）。同三年二月二

十二日、入滅、五十一歳（血）。仁和寺上乘院院主・

仁和寺慈雲寺院主・石山寺座主（仁和寺）を畿内で勤

めた。仁和寺上乘院を居所とし、頼助や鎌倉で育てた

弟子との交流で、京都と鎌倉を往来した。益助法親王

跡の相続問題が、鎌倉の広沢流を北条氏出身の有助*

支持する人々と法流を継承する益性法親王を支持する

人々に分裂させた（金文六六九二）。通称は、上乘院。

益性法親王 弘安七年（一二八四）—文和元年（一三五

二）。父亀山天皇（紹運録）。真言広沢流。仁和寺上乘

院を益助法親王から継承した（仁和寺）。嘉元二年（一

三〇四）四月六日、益助法親王から『諸尊法目録』を

伝授された（金識一三二二）。同年十二月七日、元瑜か

ら佐々目遺身院で西院流受明灌頂を受けた。時に、二

十一歳（血・西院）。益助法親王跡の後継問題を北条

氏出身の有助*と争い、劣勢に立たされたが、武蔵僧正

経助・極楽寺長老順忍・称名寺長老劔阿の支持を受け

て対抗した（金文六六九二）。益性法親王は、支持する

人々に仁和御流をはじめとした広沢流の伝授を行った。

称名寺聖教の中核をなす真言密教広沢流の聖教は、益

性法親王から釵阿に伝授されたものが多い。また、益性法親王が称名寺長老釵阿とやりとりした一連の書状が現存する（金文）。正和五年（一一二六）上洛の時、

釵阿に『灌頂印明』を授けた（金識二八二）。正慶二年（一一三三）五月、頼助の弟子佐々目僧正有助が北条高時と共に亡くなると、益助法親王から継承した仁和寺上乘院院主に復帰した（仁和寺）。建武二年（一一三五）二月二十五日、中宮（新室町院）御産御祈仏眼法を白川坊で勤めた（門）。康永二年（一一三三）三月四日、二品に叙す（仁和寺・釈家管班記）。文和元年十一月十三日、入滅（常）。通称は、下河原宮・禅林寺宮。称名寺伝来資料に、書状・聖教が多く残る。

円意（円親） 承安二年（一一七二）―建長四年（一二二五）二。父従五位下藤原長信（三・尊）。天台寺門流。建仁三年（一一〇三）十一月十九日、恒恵から園城寺唐院で伝法灌頂を受けた（三）。承久三年（一一二二）五月二十七日、鎌倉で世上無為御祈の導師を勤めた（吾）。安貞元年（一一二七）四月二十九日、將軍家病惱御祈

として、千手法を勤めた。時に、律師（吾）。同年十一月二十四日、將軍家病惱御祈五壇法の金剛夜又明王壇を勤めた（吾）。同年十二月十三日、將軍九条頼経護持僧・護持陰陽師の結番に選ばれた（吾）。延応元年（一一三九）十一月二十一日、將軍家御産御祈を勤めた。九条頼嗣誕生（吾）。仁治三年（一二四二）十一月二十九日、將軍家御祈関東五壇法で降三世明王壇を勤めた（門）。寛元元年（一二四三）二月十日、將軍家御祈関東五壇法の大威徳明王壇を勤めた（阿・門・五壇法日記）。同二年正月八日、天変御祈金剛童子法の導師を勤めた（吾）。同年六月三日、天変御祈尊星王法の導師を勤めた（吾）。同三年二月二十五日、久遠寿量院八万四千基泥塔供養の導師を勤めた（吾）。同四年四月二日、前將軍九条頼経御祈関東五壇法の降三世明王壇を勤めた（阿・門・五壇法日記）。建長四年四月十一日、入滅、八十一歳（三）。通称は、如意寺・宰相。如意寺は入室の師慶範から継承した（三）。

円曉 久寿三年（一一五六）―正治二年（一一〇〇）。父

行憲法眼、母源為義女(三・尊・諸・招運録)。天台寺門流。寿永元年(一一八二)九月二十日、源頼朝の招請を受けて鎌倉に下着した(吾)。同年九月二十三日、鶴岡若宮別当職(初代社務)に補任(吾)。同年九月二十六日、鶴岡若宮別当坊の立柱上棟が行われた(吾)。円晁の鎌倉に下向を機に、行晁の弟子を中心に園城寺から鎌倉に下向する学侶が続いた(三・諸・供・吾)。

建久三年(一一九二)二月十三日、園城寺参院入堂のため上洛(吾)。同年五月九日、行晁から園城寺蔵松坊で伝法灌頂を受けた(三)。同五年十一月十三日、鶴岡一切経供養ならびに両界曼荼羅供の導師を勤めた(鶴)。正治二年十月二十六日、入滅(吾・鶴)。鶴岡社務は、弟尊晁に譲った。通称は、宮法眼。

円景 暦仁元年(一二三八)―正和四年(一二三五)。父長尾左衛門尉光景(諸・供・両)。天台寺門流(諸・供)。*静禅受明灌頂(両)。弘安三年(一二八〇)二月十一日、鶴岡両界壇所供僧に補任(諸・供・両)。同五年十一月、鶴岡蓮華坊供僧に補任、両界壇所供僧は兼帯(諸・

供・両)。永仁二年(一二九四)十二月二十日、鶴岡両界壇所供僧に再任(相承院・両)。正和四年四月二十二日、入滅。七十八歳(諸・供・両)。通称は、兵部・少納言。(相承院)に、両界供僧職補任の文書が残る。

円玄 安元元年(一一七五)―建長三年(一二五一)。父権大納言藤原隆季(尊)。法相宗(尊)。承元四年(一一二〇)、少僧都に補任(興)。元仁元年(一二二四)四月四日、興福寺権別当に補任(興福寺略年代記)。貞永元年(一二三二)三月九日、興福寺別当に補任(興福寺三綱補任)。天福元年(一二三三)四月二十日、寺内の内紛により興福寺別当を解任(興)。嘉禎三年(一二三七)六月二十三日、大慈寺新造丈六堂供養の導師を勤めた(吾)。同年七月十一日 北条政子十三回忌供養の導師を勤めた(吾)。短期の鎌倉滞在と推測される。暦仁元年(一二三八)四月二十一日、清水寺僧徒狼藉により、興福寺権別当を解任。時に、権僧正(興)。建長元年八月二十二日、興福寺別当再任(興福寺三綱補任)。同二年正月十七日、興福寺別当辞任(興

福寺三綱補任)。同三年十一月二十八日、入滅。七十六歳(北大路家譜)。通称は、東北院僧正。

円春 ?—嘉暦元年(一一三六)。真言小野流(常)。嘉暦元年六月十二日、入滅(常)。通称は、三位法印。

円重 文永十年(一一七三) —元弘三年(一一三三)。父

渋谷重方、母渋谷二郎入道重仏女(諸・供・両)。天台寺門流。契覚^{*}から受明灌頂を受け、定顕から伝法灌頂を受けた(三・諸・供・両)。徳治元年(一一三〇)九月四日、鶴岡蓮華坊供僧に補任(諸・供)。正和四年(一二二五)十一月十四日、鶴岡両界壇所供僧に補任。

蓮華坊供僧は兼帯(諸・供・両)。正中二年(一二二二)四月七日、定顕から花王院で伝法灌頂を受けた(三・諸・供)。嘉暦三年(一一三二)八月十三日、相模国北深沢郷内の供料田をめぐる長江政綱との相論で関東下知状が下された(相承院)。元弘三年六月十日、入滅。六十一歳(諸・供・両)。通称は、大夫。

円昌 生没年未詳。天台寺門流。天福元年(一一三三)正月十日、鶴岡座心坊供僧を審範^{*}から譲られた(諸・

供)。鶴岡御殿司を勤めた(諸・供)。通称は、豊前律師。

円信 生没年未詳。父平氏家人越中次郎兵衛盛嗣。三河

国額田郡の人と伝える(諸・供)。天台寺門流(諸・供)。養和年間(一一八一—一一八二)、北条時政の推挙で鶴岡供僧に補任と伝える(諸・供)。建保五年(一二二七)七月二十日、鶴岡座心坊供僧に補任(諸・供)。嘉禄元年(一二二五)正月十四日 北条政子御願による鶴岡最勝八講の講衆を勤めた(吾)。寛喜三年(一二三二)五月十七日、鶴岡大般若講ならびに問答講の問者を勤めた(吾)。

円審 生没年未詳。父藤刑部卿入道(三)。天台寺門流。

文暦元年(一二三四)二月二十八日、道禪^{*}から岡崎上乘院で伝法灌頂を受けた(三)。正嘉二年(一二五八)六月四日、勝長寿院供養曼荼羅供の職衆を勤めた。時に、権律師(吾)。通称は、讃岐。

円親 生没年未詳。父伊賀守藤原定親(三)。天台寺門流。嘉禎元年(一二三五)六月二十九日に明王院五大堂安

鎮法の職衆を勤めた。時に、律師（吾）。同年十二月二十四日に將軍家御不例御祈尊星王護摩を勤めた（吾）。延応元年（一二三九）十一月二十一日、二棟御方將軍家若宮（頼嗣）御平産御祈の験者を勤めた。時に、僧都（吾）。仁治元年（一二四〇）正月十七日、慧星御祈として箱根本地護摩の導師を勤めた。時に、法印（吾）。同二年九月十五日、月蝕御祈の導師を勤めた（吾）。通称は、宰相。本項の円親と、改名前の円意の二人が（吾）に記載されている。

円性 生没年・家族未詳。真言広沢忍辱山流。鶴岡社務定親の弟子（諸・供）。承久元年（一二一九）八月一日、鶴岡円乗坊供僧に補任（諸・供）。宝治元年（一二四七）六月、定親が三浦泰村の義兄にあたることから、宝治合戦の縁坐を問われて鶴岡社務を解任されて上洛する時に同行した（吾）。通称は、伊予僧都。

円全 生没年未詳。父少外記中原師澄（門司氏系図）。明経道中原氏出身で、鎌倉幕府の奉行人。安貞元年（一二二七）二月二十七日、北条家の大倉御堂地曳に伴う

相地の諮問を受けた（吾）。寛喜三年（一二三二）六月十五日、由比浜鳥居前で行う風伯祭の祭文起草。鎌倉で風伯祭を行った初例と記す（吾）。時に、法橋（吾）。同年十月十九日、二階堂御堂の地を執権・連署が巡検する日次定で、円全は示された日を問題なしと勘申（吾）。貞永元年（一二三三）正月二十三日、北条泰時が山内殿に移る日の暦日の吉凶を諮問された（吾）。同年五月十四日、御成敗式目発布に際し、清書を勤めた（吾）。同年十二月五日、北条泰時から鎌倉幕府保管文書の目録作成を命じられた（吾）。嘉禎二年（一二三六）三月十三日、北条泰時四位昇進に伴う風伯祭の祭文起草を行った（吾）。通称は、越前。法鉢をした法師陰陽師か。

円智 ?—文永元年（一二六四）。父龍華院阿闍梨信宗（尊）。天台寺門流。建長二年（一二五〇）十二月十日、頼兼から鶏足坊で伝法灌頂を受けた（三）。同六年、鶴岡安楽坊供僧に補任（諸・供）。尾張律師円定に同宿。文永元年六月三日、入滅（諸・供）。通称は、七郎僧